

文の文字であらうと解釋することが出来るであらう。しかし此説は Grimme 博士の説が正しいこの前提のもとに可能な説となるのであつて今日のところ未だ問題たるにすぎない。シナイ碑文の解讀等の研究は尙ほ之を將來に俟たねばならぬ。

- (1) Edouard Naville, *Archaeology of the Old Testament*. London 1913. p. 13.
- (2) A. H. Sayce, *The Higher Criticism and the verdict of the Monuments*, London 1892. pp. 37—46.
- (3) *The Cambridge Ancient History*, vol. I, Cambridge 1923. p. 189.
- (4) *Ibid.*, p. 189.
- (5) *Journal of Biblical Literature* vol. XXXV, 1916. W. C. Wood, *The Religion of Canaan, from the earliest times to the Hebrew conquest*, p. 278.
- (6) *The Cambridge Ancient History*, vol. II, 1924. p. 61.
- (7) *Ibid.*, p. 356.
- (8) *Ibid.*, *Ed. Naville, Archaeology of the O. T.*, pp. 17—18.
- (9) *Ibid.*, p. 71.

三角縁神獸鏡年代考定上の一二の新資料に就て

梅 原 末 治

一

三代古銅器の後を承けて漢代に至り特殊の發達を遂げた支那の金屬古鏡に對しては近年本邦學者

の熱心な研究に依つて、其の基準をなす年代觀が大體に於いて確立するに至つた。然し乍ら中で本邦上代の古墳から多數に發見する大形の所謂三角

縁神獸鏡のみは、銘文に明に支那製作を證するものがあるにもかゝらず、彼地に類品の乏しいこと、年代考定の據所とすべき年號鏡の類を見ない點などが研究を困難ならしむる因由をなして、獨り此の類のみ其の製作の時代に關して相容れない二説が七八年來並存してなほ歸一を得ないである。これは單に鏡鑑年代觀の上から遺憾であるのみならず、引いて同式鏡を多く藏する我が古墳の性質の考査にも至大の關係を有するから影響するところが多く。従つてそれが解決は單に鏡鑑學に於いてのみではなく、本邦考古學界の一つの大きな問題となつてゐるわけである。

さて右の神獸鏡に對する二つの相容れない年代觀と云ふのは改めて詳述する迄もなく、一つは該形式の盛行を以て王莽代に中心期ありとする高橋博士の説であつて、他は三國の魏の前後に主として行はれたと解する故富岡先生の説である。前説

の因つて起る所以のものは該形式鏡中に王氏作竟の銘を有する遺品が存し、並に新作大鏡ではじまる類があつて、右の王氏が王莽を指し、また新はその國號を表はしたものと見ることにあつて、一應の理由はあつたわけである。

然しながら却いて考ふるに王氏なる姓は支那に非常に多い點から、單に王氏と云ふのみで王莽と斷することは早計であり、また語法の上から新作大鏡の新は名詞と解する外にこれを副詞として「新たに」と見ることも出来るから、如上の見解は理論上から疑いを挿まれて他に別な據所のない以上それのみでは俄かに信じ難いのである。これに對して魏代^{中心}説は、同じ形式中に魏代に始めて置かれた徐州なる地名と王莽の代に宜陽と云ひ後漢は通じて雒陽に作つたのを同じ魏に洛陽と改めたその洛陽なる地名の並び存する遺品があり、また内區の半肉刻の神獸の^手法法の相似た鏡の漢末魏

晋に多いことに基いたものであるから、前者に比して可能性が多い様に考へられる。で私は高橋氏の新説が發表せられた際、直ちに「所謂王莽鏡に就いての疑問」なる一篇を草して前説の缺陷を指摘して、現存の資料からは後説の寧ろ據るべきものなのを記したのであつたが、鄙見は不幸にして前説の祖述者とも云ふべき後藤守一氏から反駁を受ける事となつた。氏の所説の主意は右に記した王莽代の地名の改稱なるものが果して文献に見ゆるが如く果して行はれたものや否やは疑問であるから單に洛陽とあるのみで魏代と斷するのは早計であると云ふに存したが、氏もまた前説の證據の不充分なとは認められて末尾に假りに漢魏式として置くが無難であらうと云はれた。これは一面からは確かに穩健な所説ではあるが、不充分とは云へ既に據所となる點の存する以上かゝる拆衷説に満足すべきではない。で私は上の二説の孰れが果

して是であるかを一面新資料に依り、また他方考古を新にして解決すべく微力を致した。而して過去數年間に於いて私の接手した限りでは、同式鏡魏代中心説を助くる資料のみが見出されて、いまだ一つも前説を價值づけるものを見ないのである。一例を擧ぐるならば西晋の泰始七年の王氏作青同之鏡と銘に書いた立派な記年鏡が支那から將來せられて、王氏作の銘のみで種々な形式のものを王莽代と斷することの當らなかつた事を實物の上から示した如き、また王莽を中心として前漢末から後漢に榮えた漢の樂浪郡の古墳から近年夥しく發見せられる古鏡に我が三角縁神獸鏡の類の殆んど存しない事實が同鏡を王莽代とするに一の大きい枝梧を生ずる點の如き是れである。然し如上の資料に就いては既に「藝文」「東洋學報」等で論じた事があるから茲に改めて説くを要しないが、最近に至つて更に別な該問題の解決に役立つ遺品

が出て来て、而もその一つが上引後藤君の吾人に説明を求めた「王莽の地名の改稱が果して當代實際に行はれたか否かの點」を明にする緊要な記録であることを愉快を感ずる處である。即ち以下にこれを紹介したい。

二

右の新資料と云ふのは昨年秋朝鮮總督府古蹟調査課員の手で發掘調査を行つた北部朝鮮の漢の樂浪郡の古塚から出土した漆器の一つにある刻銘の示すところである。一體此の半島に於ける漢の郡縣の故地から發見の漆器に製作年代を示した長文の刻銘の存する事實を注意したのは小場恒吉氏であつて、其の例が作年調査の石巖里の丙墳に最も多く、紀年の明なものに西紀前八十五年の昭帝の始元二年の兩耳附盃をはじめ、成帝の陽朔二年（前二十三年）永始元年（同十六年）綏和元年（同八年）平帝の元始三年等の器があつて、孰れも其の

製作の年月、物品名、容量、製作工、監督官吏の名を録してあり、それ等に依つて器が當代天子の御用として西方の蜀地方の官工の手で作られたことを示してゐる。かくの如き文献は從來支那の本土に未だ嘗て存在を聽かない珍らしいもので、該容器の製作の精緻な技術と相俟ち、漢代に於ける工藝品の發達を窺ふに重要な寄與となるのは極めて顯著なことであり、同時に内に含まれた地名官名等の考證が種々の方面に役立つ點に於いてまさに、近時の東亞考古學上の一つの大きな發見と云はねばならぬ。而して私のこゝに録するものまた其の一つに相當るのである。

我が三角縁神獸鏡の年代考定に重要な關係のある漆器はやはり始元二年、元始三年等の銘ある類と同じく、文に耳椀とある兩耳附の盃であつて、それに刻銘を有するもの。不幸いま文の上下の一部分は缺けてゐるが、小場君の苦心に依つて次の

如く読み得て、ほゞ文意明に、その初の二字の「始建」なのが推定出来る。そこで出土の墳は内墳であるから同墳發見漆器中紀年のあるものゝ最後に當るわけである。

始建

□國五年子同郡工官造乘輿漆彫畫木黃耳陪。容一升十六益(益)篋。素工□。糝工豐。□工詎。黃耳工立。畫工敷。彫工威。清工昌。造工成。護工史輔。宰音。守丞□掾忠。史倉掌。大尹播。威德子□□□。

始建國五年は西曆十三年に當り王莽が漢室を篡奪して新なる國を興した初の時期なのは明な事實である。此の文中先づ吾々の注意に上るのは年紀の次にある子同なる郡名である。子同は漢書地理志に梓潼とあるもので廣漢郡の屬縣十三の第一に載せられてあり、其の縣治即ち郡治と見るべきである。所が其の梓潼の註を見ると、

五婦山馳水所出南入涪行五百五十里莽曰子同(下略)。

とあつて王莽代に子同と改めた事を明記してゐる。

で銘文の子同は始建國五年なる紀年と對比して其の王莽の改稱した名を表はしたものとたるに相違がなく、こゝに後藤君が疑問として三角縁神獸鏡魏代中心説に反對した、彼の王莽の地名等の改變が果して實際行はれたかどうかの點に對し、始建國五年といふ彼の治世の上半期に少くも一部分に明に行はれてゐたことを如實に示すわけである。これは廣漢郡の地理上の位置から考へて當時の中心地域たる王莽の宜陽を而も新なる國號を表はしたと論者の云ふ新作大鏡の銘を持つ遺品に洛陽なる稱呼を用ひ、なほ當時にない徐州なる一地方名を錄することを肯定する王莽代説の不自然さを加へる點の大なるを何人も否み得ないであらう。

更に同じ銘文中の後半にある監督官たる郡吏の官名を錄した點に就いても、これを漢末の紀年ある同様の銘文、例へば元始三年前の兩耳盃に比較するにまた相違が見出される。即ち右の元始三年

の器の全文は、

元始三年蜀郡西工造。乘輿髹彫畫木黃耳栝。容二升十
六觔。素工豐。髹工黼。上工譚。銅耳黃塗工充。畫工
譚。彫工戎。清工政。造工宜造。護工卒史章。長良。
丞鳳。掾隆。令史寬主。

とあつて其の郡吏の官名は「漢書」載する如く、
長。丞。掾。令史となつてゐるが、前者は宰、守
丞、掾史とあつて相同じからず、こゝにも王莽の
代となつて官職名の或物が改まり、且つそれが行
はれたことを示すわけであつて、如上の見解を助
けるものと信ず。

三

右の漆器銘と共に私其の熱望する三角縁神獸鏡
の研究に向つて寄與たる別個の資料と云ふのは最
近京都市屋孝藏氏の所有に歸した晋の太康三年鏡
であつて、是れは内區の手法の一致と銘文とが興
味を惹くのである。

鏡は挿圖に示すもので、西安の出土と傳へ、面
徑五寸五分餘あるから中等位の大きさの鏡と云ふ可
く、面の反りは割合に多い。鏡面に埋葬の際それ
を包んだ絹片が附着し、また背面に群青鏽が生じ
て爲に見榮えはしないが、年號鏡としては優秀な
部類に入るべきものである。其の文様は中央の扁
平な素圓鈕を繞つた幅の廣い内區には鈕孔の直
線上に神像二軀を置き、これを挟んで相向ふ四獸
形があり、獸間に小さな一種の人物像と鳥形とを
配し、また神像の兩側にドルフィンにさも似た小
圖形を容れてゐる。而して是等がすべて半肉刻に
大きく表はされてゐるところ、内地發見の神獸鏡
の内區と同軌なのが著しい。内區の次には半圓方
形帯の一區があつて簡單な花紋を表はした半圓部
八個と同數の方格とを交互に置き、次に二重の突
起帯があつて外區となつてゐる。銘文は此の外區
にあつて全文は次の如くである。

太康三年六月卅日。吾作明鏡。幽凍三商。四夷自服。

多賀國家。人民安息。胡虜殄滅。時雨應節。五穀豐孰。

天下復。

る神獸形の三角縁鏡との一致が後者の年代推測に向つて重要な示唆を與へるものであるし、また銘文の四字句から成ること

太康なる紀年は西晋の

武帝の時以外にないか

らこれは當時のものに

相違がない。従つて其

の三年なる銘を有する

本鏡は西紀二八二年の

製作に係るわけであ

る。而して此の銘文の

四字句から成つてゐる

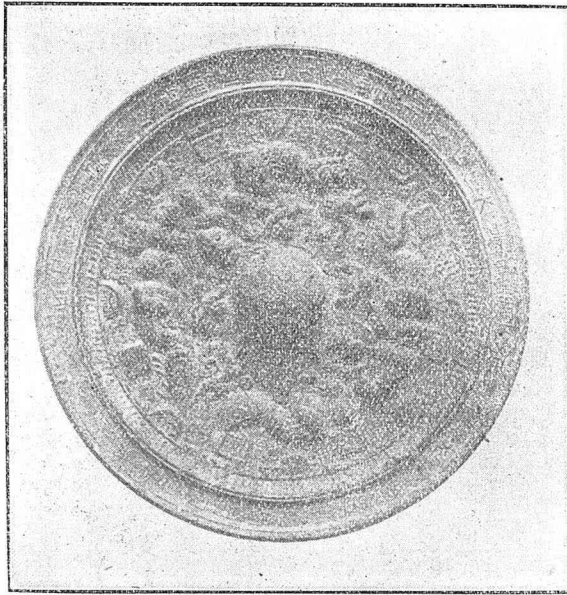
のを見逃してはなら

ぬ。

本鏡の示すところ以上

の如くであるから、形式上は寧ろ半圓方形帯の神

獸鏡の部類に入るべきであるが、右の内區に於け



(藏氏屋守) 鏡獸神年三康太晋西

するに略ぼ疑のない繪模様神獸鏡や、彼の六朝

末唐初の諸鏡の銘文の四字句なると等しい。この

も注意に上つて來る。前者の一致は挿入の寫真が如實に表はしてゐるから説明を要しないが、後者の銘の四字句であることは問題の中心となつてゐる三角縁神獸鏡中の所謂徐州鏡のそれと一致して彼の王莽代を中心として盛行した類の四字と三字の對句より成るのと相違を示し、六朝代の作品と

事は支那に於ける銘文體の變遷を反映するものとして興味あるのみならず、また右の問題の鏡即ち「新作大鏡……銅出徐州。師出洛陽」の銘文のものを王莽とする見解の可能性を弱めるものであらねばならぬ。

太康鏡を紹介した機會に同じく記したく思ふのは守屋氏がそれと同時に手に入れられた吳の黃武鏡である。これは同代の年號鏡に多く類例を見る處の小形品(徑三寸五分、面反り一分)であつて、鉛銅色を呈した割合に薄い(縁厚一分)粗末な半圓方形帶神獸鏡の式ではあるが、銘文が珍らしく、内區の神獸の半肉刻な處と其の配列とがまた本題に關係を持つ。即ち此の内區の神獸は相並んだ二神像が上下に對峙して、それに獸形が添ひ、獸間に別に一方から見る様に置いた神像があつて、我が三角縁神獸鏡に往々類例の存する六神四獸の式に依つてゐる。而して外區にある銘文は左行で、

主として左字から成るが中に右文を混じ全文が次の如く讀まれる。(文中・點を附したのは右文のもの)

黃武五年二月丁未朔六日庚巳楊州會稽山陰安本里思子
丁服者吉富貴壽春長久。

年時の間に干支を記してあるが、丁未の朔で庚巳の六日となることは到底あり得ないから、こゝにまた吳代の鏡に往々存する干支の誤りの例證を加へたわけである。然し何故にかゝる記載をしたかの理由に至つてはなほ何等考へ至らない。其の干支の次に製作地として楊州會稽山陰安□里なる地名を録し、また思子丁なる作者と思はれる人名を記してゐることは本鏡をして價值づけるものである。

以上の二資料の示すところ從來の疑問を氷解するものとしてはなほ不充分であるかも知れない。さり乍ら、我が神獸鏡を以て王莽代の作品とする

見解に比して、それを魏代に製作の中心期があるとする説のより有力であることの傍證として、可なり重要な役目をなすものと信ずる。而して從來數へられた同じ様な資料を併せ観ることに依つて

同式鏡の年代觀が自ら表はれ來るのである。紹介を終るに當つて私は此の有益な資料の提供者たる小場恒吉氏と守屋孝藏氏とに謝意を表したい。

日本海沿岸石器時代遺跡の地理學的考察(上)

文學士 小 牧 實 繁

史前地理的研究が地理學考古學の兩分科に關係し兩者間の連鎖となる事は、歴史地理的研究が地理學歴史學兩分科に關係し兩者間の連鎖となると同一轍で、史前地理的、歴史地理的兩方面の研究を綜合統一したる地理的研究の一分野が地質學上所謂第四紀時代の研究と密關係を有し斯くて又地理學地質學の兩分科に關係し兩者間の連鎖となる事は吾人の言を俟たずして明かであるが、此の意

味に於て地理學は史學考古學と三者相對立し相提携する鼎足にも比すべく又史學考古學地質學三補助學科の上に立つ鼎彝にも喩へつべく、史學なく考古學なくしては斯の地理學は有力なる提携者を失ひ、史學考古學地質學の援助なくしては斯の地理學は存立しない。地理學殊に文科的地理學に於ては宜しく史學考古學地質學上の知識を加味利用すべきである。之れ余が年來私かに抱く意見であ